

---

# うす桃色の季節

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うす桃色の季節

### 【Nコード】

N8992L

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

春。4月。桜の季節。姉の好きな花の季節。灰原哀が、博士やコナン、少年探偵団と行った花見で見つけた大きな古い大木。『百年桜』そこには姉との思い出が存在していた。2010年度宮野の日投稿作品。Candlelightこつぶとして最後の作品。作者こつぶ、そしてCandlelight管理人で、宮野の日企画者でもあったどんぐりが愛した歌手『KOKIA』の歌う同タイトル『うす桃色の季節』のソングノベルズです。ソングノベルズが苦手な方はご注意ください。

## 前編（前書き）

歌を聴きながらあるいは、歌詞を見ながら、どっぞ

## 前編

夢を見た。

桜の下で、貴女が笑う夢。

私の手を引いて貴女は嬉しそうに、まるで子どものようにはしゃいでた。

けれど、大人が数人で手を繋いで囲んでも囲みきれない、そんな大きな桜の大樹が目の前に。

それは大きいだけで、他の桜と比べると枝に咲く桜の数は少ないけれど。

貴女は立ち止まり、それを見上げるの。

サアアアッと爽やかで暖かい春風が駆け巡り頬を掠め、そうして桜吹雪が私と貴女の間を通り抜け。

一瞬、貴女の顔が見えなくなり再び顔が見えたとき、

貴女は - - -

貴女は――。

++++す桃色の季節++++

ジリリリという耳をつんざくような激しいベルの音と、間髪いれずに続いたドンと何かを強く叩く音に、彼女 灰原哀はハツとして目を覚ました。

隣に寝ている家主の、博士が作った目覚まし時計。サイドテーブルに無造作に置かれている時計。

木こり型のその時計。手には斧。そうして、それはサイドテーブルの上に振られていたようだった。

そうして気づく。

どうやら、この音の元凶はこれだ、と。

哀は思わず苦笑いして髪をかきあげる。

今日は博士が朝食を作る番だ。そうして30分はウォーキングをすると決めた初日でもある。

時刻は6時30分。：昨日は研究のために床についたのが夜中の3時半過ぎだった。しかもしばらくはなぜか寝付けず、ようやく意識を手放したのが午前4時過ぎだったっていうのに。床に入るときは既に

博士は深い深い夢の中。

…なのに、今も。博士は未だ深い眠りについている。

「まったく、迷惑な話だわ…」

健康のためにと始めることにしたウォーキングだが、普段からなかなか朝起きられないことを気にして目覚まし時計を改良しようと決めた博士は、昨日遅くまで部屋にこもっていて。それを横目に見ながら自分も研究室へと向かったわけだが。

「そもそも、スタートを当番の日と重なってしまうのがいけないのよ…」

だからといって、自分がすべて朝食をやるとなるとそれも後々博士にとってよくない。自分がいつかこの家を出ていったときに…

哀は5分後にもう一度鳴り響くであろう目覚まし時計を手にし、博士の枕元へと置く。本来ならばこの位置へ置かなければ効果がないという場所。さすがにこれなら起きるだろう。

そうして、哀は人目も気にする必要もないので、これでもかというような大きな欠伸をして部屋を出た。

3月下旬。今日は探偵団と博士とで出掛ける待ちに待った花見の日。

パジャマ姿だが、顔を洗うため、フラフラとした足取りで洗面所へと向かう。ふわふわとした髪を手櫛で梳きながら…。

夢を、見た気がする。それは誰の、何の夢だったかは覚えていないけれども――。

自分にとって憶えていたかった夢だったような気がする。それでも、憶えていなければ仕方ない。そう思うことにした。

洗面所。

冷たい水で、顔を洗う。

鏡で見る、自分の幼い顔。『灰原哀』の顔。

…姉が死んで、もうすぐ1年になる。

もし、姉が生きていたら。

おねえちゃんが生きていたら、こんな顔になっていても、私を探し当ててくれるだろうか――。

『宮野志保』だと、気づいてくれるだろうか。

おねえちゃんとは自分がしていた研究のことをあまり知らなかった。それでも、探し当ててくれただろうか。抱きしめてくれただろうか。

多分、「辛かったね…」と泣いてくれたような気がする。

そこまで考えて、自分の考えを強く打ち消した。

なぜなら自分がこの姿になったのは、姉が自分を組織から救おうとして敢えて身を染め、そうして結局殺されてしまったことに対してのことだったから。本当は死ぬつもりだったのに。死んで組織に反発しなかったのに。

気がつけばこんな姿になって、まだ、生きている。

姉と会えずにいる。

いいように考えれば、この姿になって組織から抜け出たことで、

こんな人の好い博士や、江戸川コナン、探偵団のみんな、毛利蘭：  
など、さまざまな人と出会えた。普通の生活を始めることができた  
かもしれない。それは、姉の死と引き換えに成し得たものだったの  
かもしれない。

それでも、生きていて欲しかった。もっと一緒に思い出を作りた  
かった。

果たせなかった約束だっただくさんあったはずだった。

組織を抜けて、自由になったときに絶対しようね、という約束が  
自分たちにはたくさんあったはず。

逢う度に1つ1つ増えてきた約束。いくつあっただろう。

子どものころからしてきた約束は、いくつ叶えられただろう。果  
たすことができただろう。

「おねえちゃん……」

悔やむことがいくらでもある。

逢いたい。逢いたい。逢いたい。

「おねえちゃん……」

鏡を見つめ、呟いた瞬間。

ジリリリリ、と言う激しいベルの音と、今度は聴こえない朝聞い  
たはずの音。その代わりに、博士の悲鳴が家中に響き渡り、感傷的  
な気持ちを現実へと引き戻してくれた。

そうして、鏡を見つめ、呪文をかける。

笑わなくちゃ、と。



今日はおねえちゃんの好きな桜が沢山見られる桜祭りの日。  
博士が車を走らせ、有名な花見名所へと連れて行ってくれるとい  
うのに。

「そう。こんな顔してたら、あの人にも怒られるわね…」

ねばすけな博士に、おせっかいな探偵さん。そうして、お人よし  
な探偵団の皆にも。

哀は、頬をこれでもかというほど両手でぱちんつと叩いた。  
鋭い痛みが頬全体に走り、そうしてその後でぎゅつと唇をかみ締  
め気合を入れると、洗面所を後にしたた。

「…で、結局初日はどうだったんだ？博士はちゃんと起きられた  
のか？」

「…ええ、一応ね。…ただ、思いのほか痛かったみたいで、結局  
治療の方に時間を使い、

ウォーキングも今日はパスしたみたいよ。…それで、大事をとっ  
てまた寝ちゃったわ。だから今日の朝食は私が作ったの」

「…そっか、だから絆創膏してたんだ、博士。…ま、自業自得っ  
てやつだな」

「そうね…」

コナンと哀はそんな話をしながら桜通りを歩いていった。

確かに、探偵団と3メートル先を歩く博士の額はまるで三つ目小  
僧のように大きな絆創膏を

額の真ん中に貼っていた。

博士の車で高速道路を超え、東京を抜け、ようやくたどり着いたのはお昼前。

その町は、その日、大通り一帯で『桜まつり』と称してイベントをしていたので、人通りが多く、その公園につくまでにも沢山の種類の桜を見ることができたのだけでも。勿論、わんさか人に押しつぶされそうになりながらも。

1、5キロにも及ぶ桜の木が延々と続く通りには、両脇に隙間なく屋台が並んでいて。

焼き鳥、フライドチキン、お好み焼きなどの匂いに何度も足を止め、結局両手に抱えきれない食べ物を持ち、口にはほお張りながら道を歩く。それもまたこの時期の醍醐味であって。

大通りよりどつと人が少なくなり、6人はようやく安心した心地になって公園内の桜を見上げながらゆっくり歩いていた。

「…で？わざわざこの公園に私たちを連れてきた理由は？この規模の桜まつりだったら、

米花町でも毎年やってるし、じゃなくてもここまで連れてこなくてもいいわけでしょう？」

思わず憎まれ口を叩いてみる。そう、自分とはかく、わざわざ1時間半もかけて子どもたちを連れてくる必要はあったのだろうか。キャンプ道具を今日は持っていないこの状況で。

ドライブだとしても、ここまでの道は大して観光名所というほどの場所もなく、子どもが遊んで楽しい行楽地のようなものは一切ないのに。

「ああ、この前偶然電車で大学時代の友人と再会したんじゃが、

彼がここの百年桜は最高だと…」

「ひゃく、ねんざくら…?」

博士の口にしたそのフレーズに、思わず哀は口の中でリフレインした。

## 後編

「ひゃく、ねんざくら？」

博士が口にしたそのフレーズに、思わず哀はそれを口の中でリフレインした。

どこかで聞いた名前だと思った。多分このフレーズを最初に耳にしたのは、姉からの言葉であり、それは1年前のちょうどこの時期、いつものあの喫茶店でのことだった。灰原哀が、まだ宮野志保という17歳の一人の若き、天才女性化学者だったころ。

窓辺に立ち並ぶ桜の街路樹。まだ五分咲きの桜を見ながら、アメリカン・コーヒーをすすり、嬉しそうに目を細めていた姉。明美に對して、志保もカプチーノを飲みながら、その横顔を眺めていた。昔からそうだった。姉は、桜が大好きだったから。それでも

『よく飽きないわね…。この時期何処歩いても見られるんだから、別にそんな顔しなくても』

『…そんな顔って？』

きょとんと子どものように目を丸くして聞く姉に対して、志保は視線を落としてまた、カプチーノを一口啜った。

『だらしな顔。：頬が緩んでるわ。：いい年して、そんな顔してたら誰も近づかないわよ、せつかくの美人が台無し』

『あら、ありがとう。志保にしては珍しいわね、そういうこと言うなんて。あなたも浮かれているんじゃないの？』

確かに、そうなのかもしれないと思っていた。桜を生で見たのは、自分の記憶の中で多分片手で数えられる年くらいしかなかったから。

『：浮かれてるっていうのはおねえちゃんのことを言うのよ。私はそこまでじゃないわ…』

『とか何とか言っちゃって・・・vv素直じゃないんだから』

クスクスと明美はおかしそうに笑った。

『でもね、：私がこんなに嬉しいのは、また今年桜を見られたってことじゃないのよ』

『え、：じゃあ、何？』

『志保と、こうして桜を見ていることができるということ。それが嬉しいのしたことがなかったじゃない。：お花見なんて』

ニッコリ笑う明美に対して、志保は悲しそうに視線を泳がせた。そうして、そんな表情を姉に見られたくなく、思わず視線を落とし、ボソリと呟いた。

『：…何言ってるのよ、こんなのお花見なんかじゃないじゃない。：私たちは籠の中の小鳥。籠から見える自由のない景色の一つよ』

『そうね…でも、私は嬉しいわ。あなたと大好きな桜を見るのが夢だったから。たとえ、こんなありきたりの場所でも。そうして、この、多分他の人とは違うおかしな状況の中でも、あなたと桜を見られるのならば、それで』

『…』

それを言われると、確かにそうなのかもしれない。  
しかし――。

『でも、これは最低ライン。…ううん、此処が、この場所が私たちのスタートライン』

『…え？』

ハッとして志保は顔を上げ、姉を見つめた。姉の顔は凜とした顔で。

『…私はあなたともっともっというんな桜を見に行きたい。あなたというんな桜の名所をまわって、いうんな桜を見て、そうして写真撮って、志保の笑った顔をいっぱい撮るの。幸せそうな顔をして、おねえちゃん、おねえちゃんってじゃぐ姿をいっぱい…』

しばし言葉を失って、何も言えずに言うと、姉は「そうだ」と何かを思い出したかのように自分の脇に置いていたバッグから一枚の紙切れを取り出し、それをテーブルの上に置いた。

それはどこかの雑誌のスクラップで、綺麗に切り取られた一枚の写真だった。

『以前ゼミの研修で出掛けていた場所で貰ったローカル情報誌に乗ってたの。綺麗でしょ』

写真やテレビでも見たこともないくらい大きな桜の木。

一体樹齢どれくらいなんだろうか、と考える。

姉は勿論志保が考えているのを承知だという表情で、言葉を続けた。

『樹齢120年〜30年くらいだったかしら。…ここにね、まず最初の年はここに出掛けたい』

『え…？』

どうしてだろうと思った。

この木は確かに他の木の何倍も大きく、堂々としていた。

しかし、桜が咲く密度は少なくて。全盛期はとうに越していたように思えた。

探せばもつと昔からある桜や、同じくらいの樹齢でももつと元気に咲き誇る桜はあるのではないだろうか。しかも、その場所自分たちが今いる場所よりわずかに遠いところで、またその場所の最寄駅からも離れているため、不便なところだった。

なのに、どうして…？

そう思いながらその記事に目を落としたとき、ふとある文字が目にとまった。

今までは桜に夢中で何も文を読んでいなかったけれど。周りより少し大きな文字の見出しで。

” 百年桜 悲しき約束 百年越しの願いよ届け 現代へ ”

そのフレーズが気になり、志保は見出しから目を離せないまま呟

いた。

『…百年越しの願い？…約束？』

『…ええ。明治時代だったかしら、身分の違う男女、確か男の人が大富豪の息子で、女の人が農民の末娘だった…っていう話じゃなかったかしら。その二人がどうしても結婚を両親に許されず…拳銃、この桜の下で』

『…死んだの？』

思わず表情を曇らせた志保に対して、明美は僅かに頷いた。

『そう。百年後、時代が身分など気にしないで自由に恋愛できるようになったときに、また生まれ変わりここで逢おう、って再会を誓って。…二人は信じていたの。』

きっと自分達ならめぐり逢えるって。そして記憶はなかったとしても必ず二人は恋をして、結ばれる、って。だから死ぬときも幸せだった。…そんな風に語り継がれてるわ。

もうその名も知らない二人の男女が亡くなってからとうに100年過ぎて、そうして彼らも恋をする年になった。だから、地元の人だけじゃなくて、他県の、彼氏や彼女が

いない若者がこの時期になると結構ひとりで来ることが多いらしいわよ。…自分が伝説の男女の片割れじゃないかって。…そうしてそこで前世約束した相手と再会できるんじゃないかしら、だなんて

『呆れた。…じゃあ、すぐく込んでるでしょう。…嫌よ。そんな人込みの激しいところじゃない。始めからそんなところじゃなかったって…』

顔を顰めて抗議すると明美はそんな妹に対して、小さく笑って首を横に振る。



『違うわ。…すぐにばったりと人は来なくなった』

『え、どうして…？』

『その場所では会う男女は別れる、破局するっていう噂が広まったから。…実際、それが原因ではないのかもしれないけど、ネットや雑誌ではすごいこの桜についての経験者の投稿が寄せられていたわ。恋人と、あるいは伝説を信じていくものではない、と。きっと桜には二人の思いが宿っていて、この伝説の二人が戻ってくるまで静かに待っていたんじゃないか、と…』

『…それって女の神様は嫉妬深いから男女で行くべきじゃないっていう類の話ね…呆れた』

志保が思わず苦々しい顔でその言葉を吐き出した。明美は笑って話を続ける。

『そうね。…でも、そのおかげで、そういう興味範囲で近づく若者は来なくなった。』

祟りとか呪いとか面白おかしく書かれてはいたから、たとえ本当のことではなく誰かがこの混雑を嫌がってそんな噂を広めたのかもしれないけど…それでも町は伝説がこういう風に知られる前と同じように穏やかにもどっていった』

『ふーん…よかったじゃないの。…それで？…何でそんな”いわくつき”の場所におねえちゃんを私を…』

志保は”いわくつき”という言葉をやと強調させて少しおどけた表情をして見せた。

しかし、そんな妹の言葉が耳に入らなかったのか、明美は視線をゆつくりと窓から見える桜の街路樹へと移した。そうして再びコーヒーを啜って、まるでかみ締めるようにその言葉を口にする。

『でもね…世間がどんなにこの二人を崇めても、私はこの二人の

考えに賛成できない』

『え？』

カプチーノを飲もうとしたその手を止め、言葉の真意を探るため、思わず姉の横顔を見つめた。そうして、明美もまた自分を見つめるその視線を感じ、静かに妹の方へと視線を戻す。そうして僅かに口元だけ微笑ませて、明美は小さく吐き出すように言った。

『なぜ、死を選んだの？』

『え？』

『なぜ、生きることを選ばなかったの？』なぜ、戦うことを選ばなかったの？

“身を隠し、貧乏ながらも生活することもできたはずよ、なのに、なぜ…”

明美は、じつと妹を見詰めた。

『なぜ、諦めたの？』

『…おねー・・・ちゃん』

その瞳に力が籠っていて。見たこともない強い光が姉の瞳の奥に見えた気がした。

『…この伝説を知ったとき、ずっと思っていた。そして顔も知らない名も知らない、どこも誰かもわからない100年前の二人のことを私はずっと思っていたわ。』

“叶うかどうか分からない100年後に望みを託して死んでしまふより、その時、二人で生きている事を大事にすべきだったんじゃないかしら”ってね。…そんなこと、この桜の下の前で言ったら、私は二人に、あるいは桜の神様に怒られちゃうかしら？』

おどけたように笑うと、明美はただ黙ったまま、瞬きもせず自分を見つめている妹に対して、砕けた表情から、ずっと真面目な表情へと変えた。

『…私は諦めないわ。絶対。…こんな運命、信じない』  
『…ちよっと、おねえちゃん、声、おっきい・・・』

あわてて辺りを見渡し、声を潜めて志保が嗜めようとすると、明美は目元をうつすら細めて『大丈夫』と呟いた。

『…私はね、あの桜に行つて、桜の神様に、伝説の二人に説教してやるの。そのときにあなたがいないと、説得力がないでしょ？』

『…そんなこと考えてたの…』

『ええ。…そして、此処があなたと私のスタートライン。ねっ、記念すべき場所だと思わない?! …そうね。…来年』

『えっ?』

唐突に出た言葉に、志保が目丸くすると、さらに明美は子どものように楽しそうに声を上げてこういった。

『来年こそは絶対あの桜を見に行きましょう、絶対、ね!』

写真を見せてはしゃぐ明美に対して、志保は微かに笑みを浮かべた。

それは肯定の証。

叶うか叶わないかわからないけれど、姉とは今までいくつも約束を交わしてきたけれども、それは絶対守りたい約束の一つになって

――。

差し出された小指に、志保はおずおずと指を絡め、何十回目の約束をした。

そうして、姉は小さく笑って、もう既に落ち着いたその表情でこう言う。

『だから。私は志保と一緒に生きる事を諦めないからあなたも諦めないで今日一日を大事に生きていくのよ』

『えっ？』

『自分を捨てないで。…大丈夫、絶対この生活から抜け出せる日が来るから。だから、信じて』

誰を？

そして、何を？

それ以上は姉は何も言わなかったような気がする。

それとも、頼んでいたデザートが届いて話が中座してそのままになったのか、哀の記憶はそこで止まっている……。――。

「…おい」

「え？」

「どうかしたのか？」

はっと我に返ると、コナンが心配そうに自分の顔を覗き込んでいた。

子どもたちはとくに伝説の桜木の下で先ほど買ってきた屋台の食べ物や並べ、幸せそうにほお張っていた。そんな子どもたちを背に、コナンはじっと自分を見つめていた。

「ぼーっとしていたぞ、オメー…。寝不足、それとも熱でも…」

熱を測ろうと、片手を自分の額に、それからもう片方の手を哀の方へと伸ばしかけたその手を、彼女は軽く握んだ。

「大丈夫、そんなんじゃないから…。ここがおねえちゃんとの約束の場所だったってわかっただけよ」

「…約束？」

思わずコナンは怪訝そうな顔をした。次の自分の言葉を待っている、そんな様子が伝わってきて、哀は小さく溜息をついた。また彼特有の病気が出た、と。

「…何？約束の内容まであなたに一語一話さなければならぬの？私の思い出はすべてあなたと共有しなくては気がすまないのかしら？」

「ば、バー口っ。そういうつもりはねーよ、ねーけどさっ」

思わず眉を顰めて嫌味を一つ言えば、コナンはあわてて笑ってごまかした。

そんな彼に対して、哀は大袈裟に溜息をつく。…でも、彼ならこの思い出話を聞いてもいい、と思える相手でもあつて。一瞬ためらったが、哀は僅かに口を開き、ぽつりとその言葉を言った。

「去年約束したのよ。1年後、この桜を見に行こうって、おねえちゃんね」

「この…“百年桜”を？」

「ええ。私たちは絶対諦めないで今を生きようって。…結局おねえちゃんはその約束を守るために無理して組織と戦って殺されちゃったけど…だから約束は果たせ」

「…んなのわかんねーじゃねーか」

「…え？」

驚いてコナンを見れば、彼はきよとした表情で自分を見つめていた。

「オメーのココには、生きてるわけだろ、明美さんは」

「え？」

彼がポケットから手を出し、指を自分に向けたので、思わずその指先の行方を見つめた。指差したところは自分の心臓。

「知ってつか？人は2度死ぬって。…1度は体が寿命を終えたと

き。もう一つは人々の中で、その人の思い出が消えたとき。思い出を抱える人々の心の中でその人は生きてるんだ。体を借りて、一緒に……」

「……」  
「……ま、ありきたりな話だけださ。でもさ、俺もそう思うから」

言葉をなくし、ただじっと自分を見ている哀に対して、コナンはにっと白い歯を見せて笑った。その笑顔を見て、ポロポロと涙が自然と溢れてきた。

そうだ、きつとおねーちゃんは、ここにいる。私と共に。

そう思えた瞬間、懐かしさが急に溢れてきて、思わず自分の胸に手を当て、その場にしゃがみ込んだ。

私の目で、耳で、手で。

きつと私と一緒におねーちゃんはここにいて感じているんだ。

『私は志保と一緒に生きる事を諦めないから』

たとえば、体が無くなっても。

それは、あの時はそんなつもりで言った言葉じゃなかったと思う。死ぬ選択肢はきつと考えなかったと思う。

でも、死んでもなお、その約束は有効な気がして。本当に、自分と共に生きているんだと実感して。

「哀ちゃん、どうしたの？具合悪いの？！」

「大丈夫ですかっ？！」

「悪いもんでも食ったか？！」

いつもと違う様子に気づき、心配そうに駆け寄る少年探偵団に、哀は何でもないというように首を横に振り、笑ってみせた。

悲しさも、切なさも、愛しさも。

おねえちゃんと過ごした、おねえちゃんが生きていた証を大事にしよう。

寂しがることなんてないのだ。

おねえちゃんは、自分の体の中で生きているから。自分が死ぬまですつと共に生き続けているから。

そうして、死んでも尚、空の向こうでめぐり合える。

だから今は、この1日1日を大事に生きていこうと。

大事に過ごしながら、ここにいる大事な人たちと共に、おねえちゃんと共に交わした約束1つ1つを果たしに行こう。

立ち上がり、自分の何十倍も大きいその桜の老樹を見上げる。

去年見た写真より、桜は元気に咲き誇り、ほっと胸を撫で下ろす。

桜の神様は、そうしてこの伝説の二人の魂は、私たち姉妹を歓迎



してくれているのだろうか。

おねえちゃんも見ているだろうか。私の目を通して、この約束の桜を。

おねえちゃんだったら何て言うだろうか。私の口を通して、どう言葉にするだろうか。

ねえ、おねえちゃん。

ぐるぐる考えても浮かばず、でもおねえちゃんだったらきつとこんな言葉を言うような気がした。

「助けてくれて、ありがとう。みんなとめぐり合わせてくれて、ありがとう。1年後、ここに連れてきてくれて、ありがとう」

桜の木が、哀の言葉を、もしかしたら宮野明美の言葉を聞いて、サワサワと木々を揺らし、桜を散らした。大きな手が哀を撫でてくれたかのようなそんな不思議な気がしていて、哀はもう一度小さく

『ありがとう』と呟いた。

夢を見た。

桜の下で、貴女が笑う夢。

私の手を引いて貴女は嬉しそうに、まるで子どものようにはしゃいでた。

けれど、大人が数人で手を繋いで囲んでも囲みきれない、そんな大きな桜の大樹が目の前に。

それは大きいだけで、他の桜と比べると枝に咲く桜の数は少ないけれど。

貴女は立ち止まり、それを見上げるの。

サアアアツと爽やかで暖かい春風が駆け巡り頬を掠め、そうして桜吹雪が私と貴女の間を通り抜け。

一瞬、貴女の顔が見えなくなり再び顔が見えたとき、

貴女は - - -

貴女は、嬉しそうに笑っていた。  
そうして、目を細め、ゆっくりこう言った。

『ありがとう。ようやく約束、果たせたわね』

それはそれは、幸せそうな表情で貴女は微笑んで。  
そうして夢の中の私もまた、この上なく、幸せに満ち溢れていた。

FIN .



## 後編（後書き）

2010年の宮野の日。

それは、記念すべき日でした。Candlelightの管理人で、宮野の日企画企画者でもあるどんぐりこさんの最後の宮野の日企画。Candlelightも閉鎖してしまうし、ここまで私とどんぐりこさんのコラボは沢山あったのですが、もしかしたら今回は最後になつてしまつかもしれない。

絵と小説の初コラボ、あるいはネタをもらってコラボというものはあったのですが、今回はネタもそうだけど、彼女の、そして私の愛する『KOKIA』という歌手の話で。

こつづつこにお願いがあるんだ、といつかお話の中でいつて。それが、KOKIAのとある曲からソングノベルを作ってくれないかと。

最初はあたしは結構そういうの苦手だから（作るのが）ダメだよ、無理だよ、としり込みしてたんですが、ぐりりんが歌詞を見て、私を感じたものとか送るから、それを文にしてほしいんだ、と。この思いを、小説にしたい、でもできない。それが私に託されたというわけで。

しかし蓋をあけてみたら、本当にすごい話でつ。

だから、この話の65パーセントは、KOKIAの曲を聞いて、感じて、妄想して。そのぐりりんこの産物であります。

私が脚色したのは、前編の哀ちゃんのシーンとか。明美さんと志保さんの会話とか、夢の話とか。

でも大元はホントに『少年探偵団のみんなで花見をして、そこで大木があつて・・・』

イメージしやすかったです。

それから、何度も歌詞を見て、曲を聴いて感じた。

リハビリ中の私の癒しになりました。ありがとうございます。

最後の最後、かもしれないね。コラボできてよかったです。ぐりりんこ、ありがとう。

そういうわけで、ここまでお読みいただき、ありがとうございます。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8992l/>

---

うす桃色の季節

2010年10月14日21時42分発行